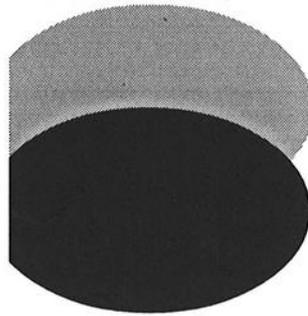


20001224

絵本学会 NEWS No.11

発行：絵本学会
発行日：2000年12月24日
編集：絵本学会事務局・広報委員会
事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学芸術文化学科今井研究室内
FAX：042-342-5191
e-mail：ehongaku@musabi.ac.jp
http://apm.musabi.ac.jp/ehongaku/top.html



絵本学会

絵本フォーラム2000 報告
会員活動報告
シリーズ絵本美術館
伝言板
インフォメーション 絵本関係展覧会・イベント
事務局からのお知らせ

『絵本フォーラム2000』報告

生田 美秋

絵本学会主催の絵本フォーラム2000が、「こども、絵本、いのち」のテーマのもとに、8月6日（日）ゲートシティ大崎で開催された。今年は「子ども読書年」にあたり、絵本学会のほかには日本児童出版美術家連盟、日本児童文学者協会、日本国際児童図書評議会、子どもと本の出会いの会などの団体が、「ドキドキワクワク子どもの本ワールド」を開催、7月20日（祝）～8月13日（日）の会期中展示や講演、お話し会やパフォーマンスなど多彩なイベントが繰り広げられた。絵本フォーラムは、この「子どもの本ワールド」の中の一プログラムとして行われた。参加者は72人（会員16人、非会員56人）。

20世紀最後の年、日本では命を軽視した少年犯罪、非行、家庭内暴力、登校拒否、いじめが大きな社会問題となっている。戦後の日本は、経済成長を最優先に中央集権的、画一的な政治が行われ、その結果市民の生活水準は飛躍的に向上する一方で、親子の断絶、市民間の連帯意識の喪失、心の荒廃などの問題を生じた。このような効率優先の政治への反省がいま、求められている。子どもたちの心と身体に何が起きているのか、荒廃の原因は、子どもの心理発達と絵本のかかわり、絵本や読書が人格形成期の子どもに及ぼす影響は何か。研究者や絵本作家に限らず絵本に関心を持つ全ての人々が、絵本と同様にそれを読む子どもの心と身体の変化に関心をはらうことが必要となっている。今回のフォーラムのテーマ「こども・絵本・いのち」は、このような状況を踏まえ企画委員会で決定した。

問題提起は、作家の立場から田島征三氏（絵本作家）、児童文学者の立場から桂君子氏（岡山県立大学助教授）、絵本専門書店の立場から三輪哲氏（名古屋メルヘンハウス）にお願いした。田島氏、桂氏は絵本学会委員。「子ども読書年」の今年は、各地で関連の催しが行われている。そのこと自体は喜ばしいのだが、一過性のイベントに終わらせてはならないこと、「子ども読書年」イコール「大人

の読書年」でもなければならないという点を、あえて強調しておきたい。

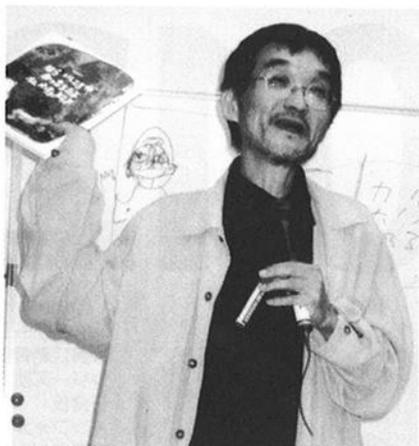
絵本フォーラムは、東京での年1回の定期開催を中心に、昨年度の大阪絵本フォーラムのような東京以外の地域での学会主催の絵本フォーラム、今年の山形での絵本フォーラムのような地元の絵本サークル、団体との共催による絵本フォーラムなど、各地での開催を推進していきたい。また、企画委員会では学会員はもちろん学会員以外の方にも幅広く参加していただけるさまざまなイベントを計画している。いずれも積極的な提案を学会事務局までFAXでお寄せください。（生田美秋／世田谷文学館・絵本学会運営委員）

〈第一部 問題提起で言及した作品リスト〉

- 1 The Highwayman (『追い剥ぎ』)
Alfred Noyes, ill. by Charles Keeping
Oxford: Oxford University Press, 1981.
- 2 『まどのむこう』
チャールズ・キーピング 絵・文、いのくま ようこ訳、らくだ出版、1997.
- 3 『ジョセフのにわ』
チャールズ・キーピング 絵・文、いのくま ようこ訳、らくだ出版、1971.
- 4 『葉っぱのフレディ』
レオ・バスカーリア作、みらい なな訳、童話屋、1998.
- 5 『ラヴ・ユー・フォーエバー』
ロバート・マンチ作、乃木りか 訳、梅田俊作絵、岩崎書店、1997.
- 6 『てぶくろ』



桂宥子氏



田島征三氏



三輪 哲氏

エウゲーニ・M・ラチョフ絵、うちだ りさこ訳、福音館書店、1965.

7 『オーラのたび』

ドーレア夫妻作、吉田新一訳、福音館書店、1983.

8 『わたしと あそんで』

マリー・ホール・エッツ 絵・文、よだ じゅんいち訳、福音館書店、1968.

9 『いりえのほとり』

A.C プーシキン作、T. マーヴリナ絵、うちだ りさこ訳、ほるぷ出版、1984.

第二部

桂宥子の部屋報告

桂氏は、カナダのトロントにある元トロント公共図書館「少年少女の家」にただひとり日本人司書として勤務。その経験をもとに児童図書館の理想像を提示した著書『理想の児童図書館を求めて』を刊行、大きな反響をよんだ。

桂氏の談話サロンでは1. 子どもの心の荒廃と「クオリティ・オブ・チャイルドフッド」2. カナダと日本の図書館の違い3. 図書館における絵本の選択4. 絵本の選択基準5. カナダの「ボーン・トゥーリード」運動などの問題が議論された。

1. 17歳の少年たちの凶悪な事件は、17歳という年齢が問題なのではなく、子ども時代の質「クオリティ・オブ・チャイルドフッド」に問題があるというのが桂氏の主張である。少年たちの心の荒廃を

防ぎ、生命の尊厳、他人への思いやを理解させる方策として子どもたちを取り巻く環境の再検討に加えて、子ども時代の読書の意義を見直す必要がある。松岡享子氏も東京子ども図書館での長年の読み聞かせの経験を踏まえて、子どもの現状と未来への深い憂慮を表明する一人である。読み聞かせ中の子どもの変化として、「くり返しの所でつまらなそうにする子どもがあらわれた」「お話しに対する子どもの反応が弱くなった」「おもしろい話をして笑わない」「内容的に軽いもの、絵の多いものを読みたがる」「話し手の目を見ない」「じっとしてられない」などの特徴をあげる。その原因として、詰め込み教育、親子の対話の機会の減少、テレビやテレビゲームの影響などの教育や社会の問題と体を動かして遊ぶ機会の減少、脳の活動水準の低下など子ども自体の身体的変化を指摘し、子どもの知的、情緒的、精神的発達の上で、読書が非常に大きな役割を果たすことを強調する。子どもの心理発達と絵本については、佐々木宏子氏の『絵本と子どものこころ』『絵本の想像性』などの研究があるが、児童心理学の成果を取り入れながらさらに研究をすすめることが重要かつ緊急の課題となっている。

2. カナダのトロントと日本の図書館には大きな違いがある。トロントでは児童図書館の図書館員は腰を据えてじっくり子どもの本と向き合わせるのに日本では職員の異動が多く絵本を扱うプロの児童図書館員が育つ環境にない。日本は図書館の普及率が高く、絵本を含む児童図書館の冊数は多いのだが、残念ながら絵本を扱うプロの図書館員が極めて少ないのが実情である。図書館の専門職としての司書の地位、大人の本と絵本の同列視など改善すべき点は多い。桂氏は『理想の児童図書館を求めて』の中でも、子どもと良書の橋渡しをするプロの児童図書館員、司書の大切さを力説している。

3. 図書館における絵本の選択については、税金で運営されている以上特定の作品を選ぶのは好ましくないという意見と、大切な税金を使っているからこそプロの図書館員が絵本をセレクトし、良いものだけを子どもに提供すべきであるという二通りの意見がある。日本では前者の意見の人が多く、カナダでは後者の意見が一般的である。ここには、日本とカナダの図書館に対する認識の違い、絵本観・子ども観の違いが端的に現れている。子どもが自分自身で選べる本の範囲は限られている。どれを手にとって同じくらいの質が約束されていれば良いのだが、そうでないのが現実である。子どもの感受性豊かな時間は短く、限られている。この時代に良い読み物、本物に触れさせることが大切であり、大人の義務であるというのが桂



左から生田氏、岩崎氏、田島氏、桂氏、三輪氏、藤本氏



柱宍子の部屋

氏の主張である。前掲書の中で、公共図書館の厳しい絵本選択が出版界の質的向上に一役買っているカナダの実情が報告されている。

4. サロン参加者それぞれがどのような基準で絵本をセレクトしているのか、選択の基準について意見交換を行った。「自分がよい(面白い)と感じたもの」「ストーリーもイラストも含めて美しい本」「絵本を読んでいる仲間が集まって選んでいる。個人で選ぶより偏らずに選べるのでは」「子どもの心にストンとくる絵本を選んでいる」とさまざま。桂氏は、解説書や他人の意見に耳を傾ける姿勢も大切だが、自分自身で読んで肥えた目で子どもに合った絵本を選ぶ姿勢、古典を大切に作る姿勢こそ大切にしてほしいと語った。

5. 最後に、親と乳児に絵本を贈るカナダの「ボーン・トゥ・リード」運動の紹介があった。子どもが絵本と出会う機会を個々の家庭にゆだねるのではなく、全ての子どもが絵本と出会う機会を保障する制度として確立しようというユニークな取り組みである。日本でも、「子ども読書年」推進会議が、乳幼児を対象とした「ブックスタート」の導入に向けて動き出した。11月4日(土)にはブックスタート国際シンポジウムが英国のブックスタート関係者を招聘して東京国立博物館で開催された。絵本研究者は、「読み聞かせ」や「ブックスタート」などの運動にも強い関心を持ち、積極的にかかわることが求められている。(生田美秋/運営委員)

田島征三の部屋報告

第一部の問題提起の部では、今回のテーマ「こども・絵本・いのち」に因んで、司会者がまず、田島さんの著書『絵の中のほくの村』の内容に触れ、田島さんの子ども時代についてたずねました。田島さんは、幼いころのさまざまな体験の中から忘れられないエピソードのいくつかを語ってくださり、その体験をもとに作品『しばてん』ができあがった経緯を話してくださいました。作品には、人が体全体で体験したことが自ずとにじみ出てくるのがよくわかりました。

続いて、田島さんが東京都西多摩郡の日の出町に移って、自然とともに生きていく中から、いのちの貴さを学んでいかれた経過を楽しく話してくださいました。田島さんは「こどもと絵本」について、例をあげながら、ときに真剣に、ときにユーモアを交えて話してくださいました。私たちは、自然の中で、また子どもと真正面から向き合って生きていく生活から作品『ふきまんぶく』や『やぎのしずか』のシリーズが誕生してきた経過を聞き、現代の子どもに「精神

的な豊かさ」が必要なことを感じさせられました。

田島さんは絵本は一時にたくさん売れるより、少しずつ長く売れ続けることが大切であると語ってくださいました。私たちは、現在の本の販売状況を考える上で貴重な意見と受けとめました。さらに「こども・絵本・いのち」を考える上で、本は大人が押しつけるのではなく、子どもの目を借りて選んでいくことが大切であると語られました。美しいとか汚いという大人の感覚と、子どもの感じる意識とはそのまま同じではないことをあげ、本の評価を大人がしてしまうないようにと語ってくださいました。

さらに、環境汚染問題に取り組み、「日の出の自然を守る会」をとおして、第二廃棄物広域最終処分場建設に反対してきたことを熱く語ってくださいました。ゴミ処分問題への鋭い警告は、そのまま田島さんの生きる姿勢であり、「命のすばらしさを伝えたい」という田島さんの言葉が表すように、自然に敬意を払って生きていくことが、そのまま「こどもといのち」を守ることにつながっていくのだと考えさせられました。そして、最後に制作中の作品『木の実』の絵本を自然を重んじて製作している様子を伺いました。

当日は大勢の人たちが集まってくださいましたが、田島さんの作家としての厳しい姿勢と自然と親しんできておられる自然体の姿、ありのままのお人柄が感じられ、楽しいひとときを過ごすことができました。(藤本朝巳/運営委員)

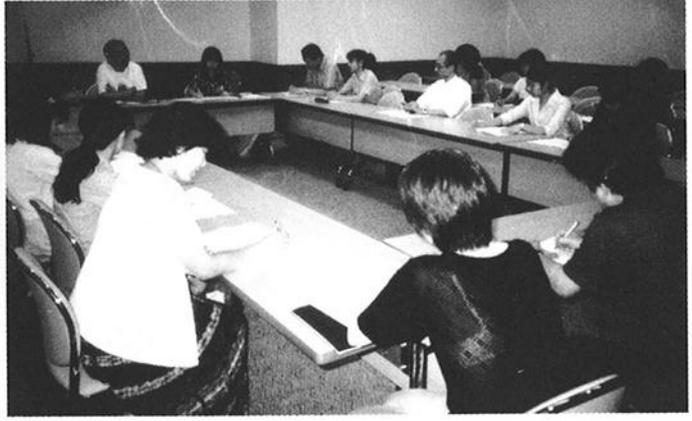
三輪 哲の部屋報告

日本で最初の「子どもの本屋さん」として知られている三輪さんの部屋には、編集者・保育者・学生・司書・読者・母親などなど、さまざまな立場から絵本とかかわる人たちが20名集いました。みんなの顔が見渡せるようテーブルを円く囲んで、自己紹介をかねながら、第一部についての感想や三輪さんへの質問などを話していきました。その一部をご紹介します。

まず最初に、三輪さんの『「子どもが本を読まなくなった」のこぼをもう聞きたくない!』との発言を受けて、参加者から、「子どもの本離れというけれど実際はどうか?」という質問ができました。幼児期の子どもたちの絵本との出会いは決して減っているとは思えないけれど、一番大きな問題は、児童期からの読書感想文だろうということでした。子どもが考える読書とおとなの考える読書には大きなへだたりがあるし、「何かのために」と考える、頭の固いおとなの読書観がなんとナンセンスなことかとの指摘がありました。



田島征三の部屋



三輪 哲の部屋

さらに、絵本をとおして「子ども観の再構築の必要性」について語ってくれました。絵本をもとにおとなが変わっていきける可能性がある、つまりいろいろばたの昔話が、おとなは語りながら自分自身が楽しんだように、絵本を手にするおとなは、単なる与え手としてではなく、読者でなければならない、ということでした。700人の中学生と「いないいないばあ」の絵本を楽しんだ経験から、絵本は、何才以上という制限はあっても、何才までという制限はない、子どもと同じ世界を共有できる力、子どものもっている世界と一緒に楽しもうとする姿勢が大事なことを、さらに語ってくれました。

また、日本の絵本は歴史的には、いろいろなハンディキャップがあるけれど、漫画家やグラフィックデザイナーなどいろいろな人が入り込んでいるところがおもしろい、との指摘を聞くと、日本の絵本の未来は、何が飛び出すかわからない、まるでびっくり箱を開ける楽しみがあるようです。さいごに「本屋は文化事業、出版文化であって、出版産業であってはならない」との一言は、三輪さんのこれまで、そしてこれからを象徴的に語っていて、参加者ひとりひとりの胸に熱く届いたことでしょう。

(岩崎真理子／企画委員)

「読書とクオリティー・オブ・チャイルドフッド」

桂 有子

最近の若者が、「死」に深く関心を寄せていることは、私のゼミで卒業制作に創作絵本を選ぶ学生の中にも顕著である。一方、バスジャックやストーカー殺人など、命を軽視した少年犯罪が多発し、国中を震撼させている。今やキーワードになりつつある「17歳」の少年たちがどのような「幼児期」を過ごしたのか注目が集まっている。

家庭内暴力の悲惨な結末も多々報告されている。私の体験では、出口の見えない辛い日々を乗り越えられたのは、「我が子には本をたくさん読んでやった」という確信しかなかったと思う。実際、今、北米では、家庭でも、学校でも、子どもに本を読んでやる「リーディング・アラウド・ムーブメント」が起こっている。子どもに本を読んでやることは、単に作品に触れるだけでなく子どもと親や教師とのコミュニケーションがはかれるという効用がある。

閉塞的な社会やいじめの横行する学校生活などが、若者の心に重圧を与えていることも推測されるが、殺人や命の軽視は、断じて許さ

れるものではない。子どもたちの心の荒廃を防ぎ、彼らに命の尊さを教える具体的な方策はないものだろうか。

一連の少年犯罪により、子ども時代の大切さがあらためて認識されているが、まず、子ども時代の質、すなわち「クオリティー・オブ・チャイルドフッド」を見直す必要がある。現代は子どもを取りまく環境が歪んでいる。学校生活はもとより、家庭でも食生活、家族のありかたなどを改善する努力が必要であろう。国も「クオリティー・オブ・チャイルドフッド」を充実させるための投資は惜しむべきではないと考える。

子ども時代は人生の出発点であり、人生の心の「故郷」を形成する大切な時期である。自分は「幸せな子ども時代」を送ったという満足感が、その後の人生の荒波を越える勇気とエネルギーとなる。人は幸福感を味わってはじめて、その対立軸にある悲惨さや残酷さの不快感を感じとれるのではないだろうか。

「幸せな子ども時代」を獲得する具体的な手段の一つに「読書」がある。子どもは、家庭で、学校で、地域社会で、「本」を通して「楽しい体験」を積むことが出来る。戦後、氷川小学校で素晴らしい読書教育を受けた私の子ども時代の至福は、面白い絵本との出会であった。外国の例も取り入れながら、家庭、保育園、幼稚園、学校図書館、公共図書館で、子どもと読書を結び付けるとどのような試みが可能か、具体的にみてみたい。

優れた絵本や児童文学作品は、どれも「生」を語っている。自然の驚異や素晴らしさ、その世界に生きる喜びや楽しさ、愛や思いやりの美しさを描いている。人間ばかりでなく、鳥や動物など掛け替えない命がこの大地を共有していることも示している。

この不思議で複雑な世界に、いろいろな仲間たちと生きることは素敵なことなのだということを、感受性豊かな子ども時代に絵本を通して、ぜひ体得して欲しい。生涯、その子の中で深化し、成熟して、生きる力となるような優れた絵本に、1冊でも多く出会って欲しいと願う。

しかし、子どもだけでは、バラエティーに富んだ作品を知ることも、そこから優れた作品を選択することもできない。そこには、本と子どもを結ぶ大人が必要である。児童文学のプロと呼べる司書教諭や児童図書館員の育成が急務である。また、若い父母に向けた読書の啓蒙活動も大切であろう。カナダには生まれた時から絵本に親しんでもらおうと、母親と乳児に絵本を贈る「ボーン・トゥ・リード」という運動もある。



会場風景

「いのちを描く」(童心社)あとがきから

田島征三

「近年、田島征三の仕事は、ますます自在になり、しだいに深い抽象性を獲得してきた。田島征三の絵の中で、ヒトもバツも大根も雑草も、生命あるすべてのものが肉の哀しみと喜びを共有しながら、存在の深部で通じ合う。彼らの実在に限りなく同化した画家のまなざしを通して、画面はいつしか、生命というたおやかな抽象そのものへと転化されていく。田島征三の目に映るのは、茶色のバツや紫色のつる草などと、十把ひとからげに呼ばれるようなものでなく、それぞれの生命の内部から発光する深く充実した色彩と、それを包むプリミティブで動い生命のかたちそのものなのだろう」

堀 慎吉「生命の深い輝き」

「こども 絵本 いのち」

三輪 哲

国の読書推進事業「子ども読書年」、「いいことですねえ」とりあえずこんな感想を持ちます。「でもねえ・・・」これが次の言葉として出てきます。子どもたちが自分の気持ちを的確に表す言葉を持っていたら、同じように言うのではないかなあと思います。

子どもの本って大人のフィルターを通らなければ、子どもの前に現れません。本をつくる、流通に関わる、読書環境を整えたり読書運動に携わる、皆、大人です。だからこの句として「でもねえ・・・」が、どうしても出てきてしまうのです。そんな視点から問題点をチェックしてみようと思います。

「でもねえチェックその1」子どもたちが抱きしめて離さない本をつくっていますか、子どものものだからと、手抜きなどしていないでしょうか。子どもの目はとてもピュアで厳しいものです。

「でもねえチェックその2」全国の市町村で図書館のないところは約半数、本屋のないところは二十八パーセント。物理的に子どもの手に届く手段は思いのほか少ないのです。その上、一般の本屋さんの棚では、子どもの本占有率は三パーセントを切っていると言われています。これでいいのでしょうか。

「でもねえチェックその3」本屋や図書館での子どもの本の選択権はどうなっていますか。大人の価値観で子どもに本を無理強いしていませんか。私の店でも一冊の本を巡って、大人と子どもが争っているのを毎日見ます。学校では読書指導という大義名分のもとに、感

想文が強要され、その上コンペティションに仕立てられたりしています。

たった三つのチェックポイントなのに、子どもの「見る、聞く、知る、学ぶ」自由はけっこう狭められています。これらは皆、大人の問題です。大人の「子ども観」に委ねられていると思うのです。

「子どもが本を読まなくなった」と、言われ始めてどのくらいになるでしょう。もう言わないで、聞きたくない、これが正直な気持ちです。「子どもは(人間は)元来お話の世界が好きなのものです」、もうひとつの世界を生きているのです。読書をしている時の子どもの輝く顔は、それを見事に実証しています。

「子どもの笑顔を消さない」、こんな「子ども観」を持てたらいいですね。

マンガ、絵本、アニメーション 三学会合同シンポジウム報告

中川 素子

11月11日、東京都写真美術館で絵本学会、日本アニメーション学会、日本まんが学会設立準備会による三学会合同シンポジウム「マンガ、絵本、アニメーションは環境になった—動く絵・動かない絵」が開催された。

3つの分野が一同に会するのは初めてのことで、朝日、毎日、京都、埼玉、北日本、南日本、週間読書人など多くの新聞やNHKニュースでとりあげられた。また海外でもとても珍しい試みと興味をもたれているときく。しかし、残念なことに絵本学会員の参加がやや少なかったため、当日の報告と共に、企画者としてシンポジウムの主旨について書いてみたい。

シンポジウムは三宅興子絵本学会会長の挨拶から始まり、山口昌男氏の講演、ついで小野耕世氏、ジャクリーヌ・ベルントさん、漫画家のモンキー・パンチ氏、横山正氏のシンポジウムとなり、札幌大学学長の山口昌男氏（文化人類学）は、江戸時代の伊藤若冲の絵、また白隠、南天棒などの禅画の中に漫画の要素のみられることを図版からひきだしてみせた。

評論家の小野耕世氏（アメリカ文化論）は、絵本、漫画、アニメの三者が地続きであり、フィードバックしあっている多くの例をあげ、また非現実的なものを現実と感ずる意識の広がり”環境になったイメージ”を説かれた。

立命館大学助教授のジャクリーヌ・ベルントさん（芸術社会論）は、漫画やアニメの「動き」について語り、近代的表象や諸二元論に対してどれほど批判的でありうるか、日本やアジア特有の視覚文化へどれほど還元できるかなど4つの疑問をあげられた。

モンキー・パンチ氏は、ベルントさんの漫画分析をきき、解剖のようだと作る人らしい拒否反応を示されたが、別作家の原作を変えてしまったので3回めにして漫画連載を中止されたと、「ルパン三世」を思い出すようなひょうひょうとした話をされた。

建築家であり国際情報科学芸術アカデミー教授の横山正氏（空間史、透視画法、3D 絵本）は、このシンポジウムのタイトル「環境になった」は今さら古いのでは、それは19世紀末の出版事情にこそあてはまるとし、メグゲンドルファーの絵本などを実際に広げてみせながら歴史が古いメディア形態のほうがフレッシュにみえると説かれた。このように興味深い話が続いたが、4時間にわたる講演とシン

ポジウムを私の力で再録するのは難しい。いずれシンポジウムの報告書（送料込みで1800円）があるので、内容を知りたい方は絵本学会宛にFAXで注文していただければと思う。

シンポジウムは話が全体的なまとまりにやや欠けたが、それは最初から予想していたことである。企画者として京都精華大教授の牧野圭一氏（漫画）、東京造形大助教授の小出正志氏（デザイン、アニメーション論）、それに文教大教授の私（造形美術論）の三人は、三領域各々の問題点の洗い出しができ、多様な考えが示されればよいと考えていた。そういった意味で、このシンポジウムはまず第一歩をふみだせたと自負している。

何人もの方からこれからも続けてと感想を寄せられたが、今後三領域が集うことは、絵本研究、絵本創作、社会的活動の三点にとって欠くべからずものと考えている。たとえば、絵本研究についていえば、絵本の中のアニメーション的表現、マンガ的表現に私達はもっと注意深くしなければならない。音や光のはいった本、セル画を思わず透明画面の重なり、ミクロとマクロを移動する眼、変容する形、映像的明暗、フリップ・ブックやモアレ現象など動きにたいする興味、こま割り、吹き出し、デフォルメの強さなどである。

私は12世紀の「伴大納言絵詞」の実物大コロタイプ印刷絵巻などを授業で繰り広げてみせているが、研究されつくされていたといってもよい絵巻物は、アニメーション映画監督の高畑勲氏に「アニメーション」というキーワードを近年つけられただけで、新しい生命を得たといえる。絵本においても、アニメーション、漫画など、どちらかといえば敬遠されていた視点をもつことは、新しい断面を切り開く可能性に繋がるに違いない。いや、この文も何を今さらといわれそうだ。何故なら絵本の歴史には必ず出てくるウォルター・クレインやジョン・テニエルだって漫画をかいていたし、ピーター・シス、イシュトバン、パンニャイ、ユッタ・パウアーなどがアニメ作家でもあることは御存じの方も多いだろう。また絵本論の用語をみれば、映像と関係づけてみている部分があることは、一目瞭然だ。文部省は今年、中学校美術の指導要領に漫画やビデオなどの映像メディアをいれた。漫画や映像メディアを思考力を失わせる麻薬的視覚像とみていた人々は、考え方を180度転回させなければならなくなったといえる。教育学部の教員である私にとっても正直いってどのように取り組んだらよいか模索の段階だが、表現としての絵本をアニメーションや漫画より当たり前のように上位に置いていた見方に向き合わなければ、真の絵本研究はできないといってもよいだろう。三学会の集りは何もシンポジウムだけとは限らない。こま



シンポジウム風景



学生作品展示風景

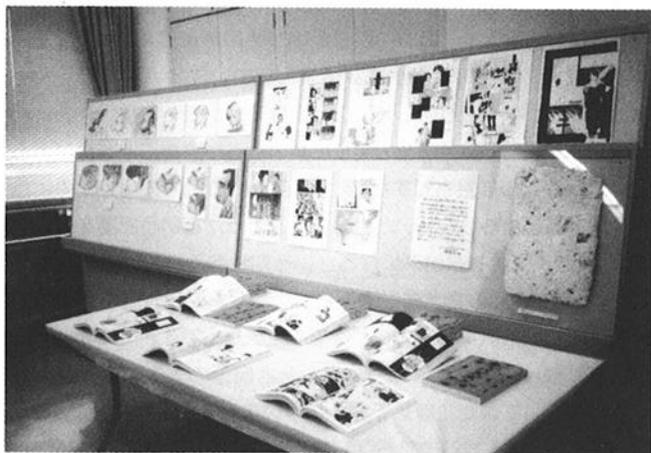
割り絵本や吹き出しのある絵本を集めた展覧会や絵本作家のアニメーション作品を見る会などを企画してもいいのだ。

もう一つうれしい報告がある。シンポジウムの同時企画として主に美術系大学による学生の絵本作品、漫画作品、アニメーション作品が展示、上映され、好評であったことだ。協力して下さった大学は、京都精華大、京都造形大、神戸芸術工科大、筑波大、東京芸術大、東京造形大、文教大、武蔵野美術大などで、たった1日の展示のために先生がたが御努力して下さった。感謝にたえない。

絵本の展示には、びっくりするほどたくさんの方が訪れ、長い時間をかけ熱心に見て下さった。製本技術の優れた大学、イラストレーションの魅力的な大学、絵本作りの発想の面白い大学など、それぞれの特色があらわれて興味深く、出品した学生達にとっても多めに勉強になったようだ。また展覧会をひらいてほしいという希望が多く、絵本学会大会時にしてもいいですねという御意見もいただいている。今回は絵本学会から実行委員として石井光恵さん、直江博子さん、落合佐和子さん、藤田順子さんが活躍してくださり、たくさんの方の学生ボランティアにもお世話になった。今後に繋がることを祈りつつご報告まで。(中川素子／絵本学会理事)



絵本の学生作品



漫画の学生作品

Reading Pictures: Art, Narrative and Childhood

— 国際シンポジウム参加報告 —

藤本 朝巳

2000年9月1～4日、英国ケンブリッジ大学、ホマトン校にて、絵本の国際シンポジウムが行われた。当シンポジウムには世界各国から、絵本作家、画家、研究者、図書館員、絵本愛好者、出版社のスタッフなどを含む360名以上の参加者が集まった。

日本からも絵本学会の会員を含め12名の参加があり、3泊4日の楽しい会であった。

当プログラムはホマトン校が中心になって企画運営を行い、なかでも当校のモラッグ・スタイル教授とヴィクター・ワトソン教授等の労によって成功した。期間中は毎日、午前中9時～12時、午後は1時～8時まで、夜には特別の催しと、盛り沢山のプログラムが行われた。

会はワトソン教授の挨拶、講義にはじまり、その後、毎日分科会が大小の会場や教室において、希望者が先着順で集まる形式で行われた。会場には、その催しにより、大勢集まったり、小数の集まりがあったりと、さまざまであった。

内容は研究者・批評家の講演・発表のみでなく、出版界からの提言、子どもの読書の実態報告、美術館員からの研究発表・報告や、14名の作家・画家のプレゼンテーションもあった。しかも世界各国からの参加者がその国独自の絵本を持参し発表して、楽しく、刺激的であった。今回は日本からも3名の参加発表があり、toy booksの研究、日本人絵本作家の研究発表、日本独特の絵語り、紙芝居の歴史と現状の紹介、実演も行われた。そして好評であった(なお、総発表者数は140名という大規模なものであった)。

英国から創り手としてプレゼンテーションをしてくれたのは、Allan Ahlberg、Quentin Blake、Ruth Brown、Anthony Browne(2000年アンデルセン賞受賞者)、Shirley Hughes、Pat Hutchins、Satoshi Kitamura(日本人)、Margaret Meek Spencer、Brian Wildsmithなどであった。それぞれ個性的な発表で聴衆(観衆)を楽しませてくれた。

特にAnthony BrowneやQuentin Blakeの発表時には大会場に立ち見が出るほどの盛況ぶりであった。これらの画家の日本での知名度と英国での評価は必ずしも一致していないことは当然といえば当然であるが、不思議な感じがした。特に英国に在住して活躍している日本人の喜多村恵、デッサン力のすぐれたRuth Brown、絵本にさまざまな手法を取り込み、斬新な絵本創りをしているAnthony Browneはもっと日本でも紹介されてしかるべきであると思われた。

なお、会期中、初日の夜はケンブリッジのフィッツウィリアム美術館で、今回協力してくれた絵本画家の原画展が行われ、ワインを片手に楽しいひと時をすごした。2日目の夜には懇親会が行われ、両日の夜は世界から集まった多くの人たちや画家と楽しく語らうことができた。

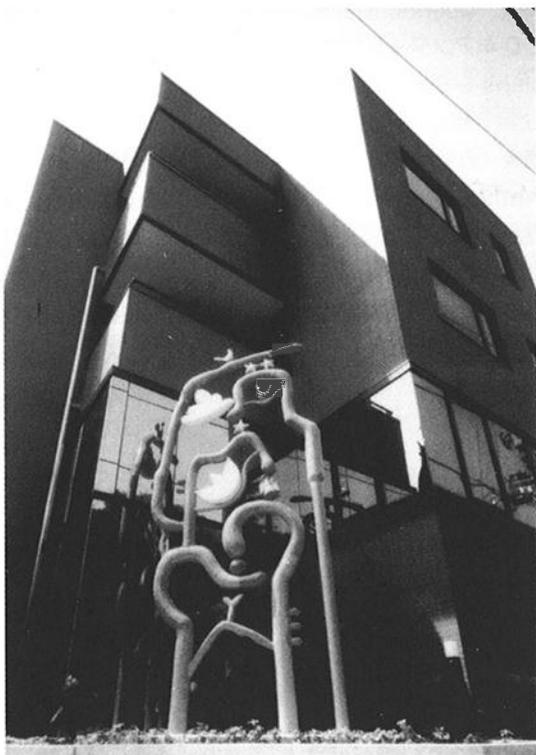
なおホマトンこうは施設も整った、美しいキャンパスを持つ大学で、児童文学関係の蔵書、美術書もそろっており、さらに参加者に、さっぱりした学生寮とホールでのおいしい料理を毎回準備して下さった。今後、日本で催しをするに参考となった。

新世紀に託して

沼田絵本美術館 沼田民江

長年の母娘の夢が実現し、現代のような社会情勢の中で人々に子供のピュアな精神を呼びさまし、安らいでいただく空間作りに専念して、所蔵品の展示以外に25回の企画展を開催致しました。二十世紀は物質文明は繁栄しましたが、経済先行で便利さを追及しすぎたために精神が追いついてなく、戦争や複合汚染など環境破壊は取り返しのつかないものとなってきています。まさに人間にとって最も大切なものが失われた劣かな世紀だったと歴史上後世に残るのではないかと考えています。二十一世紀に向けて、子供達に自分は社会の一員として何ができるかという目的意識を持たせ、基礎学力はしっかりとそして個々の才能を伸ばし、情緒面、徳育を重視した人間作りを親も先生も行政も社会の皆なが努力するべきと常々思っております。

絵本は誰でも解る言葉で、底にある哲学は、人間にとって何が大切かを考えさせられたり教えられたり、ユーモアやウィットもあり、絵と共に楽しみ癒されるものです。暖かい母のひざもとで朗読してもらったり、眠る前絵本を読んでもらった子は人間形成上、大き



美術館外観

な違いが生じます。大きくなってコンピュータの世界の中だけでは血の通った人間関係は成立できません。生活の手段として文明の利機にお世話になっていればいる程、自然や精神面を大切にし、バランスのとれた社会と人間であることに心がける事が大切です。当館はそのような理念のもと、休館日は、ピアノ、絵画、英会話、アンカードルモン（フランスの額装）等のお教室と年二、三回のサロンコンサートを催し、皆様の文化的意識の向上と安らぎの場として、又、心豊かな人々の交流の和を広げる場として精進しております。文化は心で創り上げるものですから、創造者の心を感じとれる良い感性を育て高い美意識を持っていることは知性に繋がります。四季のある日本は古来から優れた芸術が生まれ育っています。西洋の巨匠達も日本の芸術にあこがれたのです。自国の文化に誇りをもって、世界的視野でものを見、考えることのできる人が多く育てられることを念願しております。

先日、ある品格漂うご年配のご婦人が当館にいらっしゃいました。なにげなく声をかけ、お話し、ひとり旅と絵本のお話ですっかり意気投合し、私が今展示している原画、マークシーモントの「はなをくんくん」、英語のタイトルは「a happy day」のこと、ある日ラジオを聞いていたら、ある中学生がいじめにあって毎日、自殺を考えていた時、本棚の中の小さな頃読んだ古い絵本「はなをくんくん」をなにげなく取り出して、この本はモノクロで、冬眠からさめた動物達が一輪の黄色い花の周りに集まり春が来たことを喜び合うというシンプルな絵本ですが、少女は自分にもこの黄色の花のような希望があるかもしれないと自殺をとどまったというお話をしましたら、スペイン語もお出来になるという知性ある美しいお顔立ちの彼女が「私は多くの文学書を読みましたが今まで読んだご本の中で何が一番といわれたら絵本の「幸福の王子様」です。これほど私の心に深く残っている本はありません」と自分の人生の体験をオーバーラップして涙をこぼしておっしゃいました。私はとても心打たれ、時を忘れ暗くなるまでお話ししました。同じ心の波動を感じ別れがたくお見送りしました。そのご婦人のことを忘れることはできません。人は皆、喜びと悲しみ、苦しみを持って生きています。誰しも試練があります。試練は自分にそれを乗り越えられる能力があるから神様が与えてくれたのだと思うと楽になります。長いようで短い人生を、物質でなく内面の充実を大切に、生かされていることに感謝して、いつまでも夢と希望を持って天寿を全うできるよう念じながら、一冊の絵本が人生の心の宝ものとして永遠に存在するこ



展示室 1



展示室 2

とは大きな喜びです。絵本美術館をより内容のある癒しの場として少しでも社会のお役に立てればと念じて働いていますと自然に同じ波動の方々が集まり、一昨の大学の研修生がボランティアでここで働かせてくださいと申し出があり、週一日でも助かっています。又親しくしているご近所にお住まいのお医者さまの奥様も来年四月からご好意で働いてくれることになってます。九月から展示しているスロバキアの代表的絵本作家ミロスバル・ツパールさんの原画約四十点をお持ちの大学の先生が無料でかき出して下さいました。大変好評をいただいております。本当に有難いことです。私設の美術館の存続は大変困難なことです。このような佳き方々に囲まれ、ご協力をいただき、皆様のおかげをもちまして小さいながら生きた美術館と自負しております。絵本学会のますますのご発展を祈念申し上げます。(沼田民江)

〈インフォメーション〉

- ・2001年2月1日～25日 常設展
- ・20013月8日～18日 入場無料
- 桃藏順彦 西陣織帯展
- 平井恵子(当館館長) 絵画個展
- ・3月29日～5月27日
- しかけ絵本の世界展

沼田絵本美術館

【開館】11:00～17:30(入館は17:00まで)

【休館日】月・火・水曜日、年末年始、企画展入替時
1/9・2/13は休館)

2000年12月18日～2001年1月31日まで休館

【入館料】大人800円・高中学生600円・小学生400円

※幼児は無料

※入館料は、カフェコーナー・ドリンク料、消費税込み

〒158-0098 東京都世田谷区上用賀 1-25-20

TEL: 03-3708-8200 FAX: 03-3708-8201

【交通】

○新玉川線「用賀」駅下車、徒歩18分

(用賀駅バスターミナルより)

・祖師ヶ谷大蔵行き「馬事公苑交番」下車、目の前

・成城学園前行き「駒大高校前」下車、徒歩3分

・世田谷区民会館行き「駒大高校前」下車、徒歩3分

○小田急線「千歳船橋」駅下車

(バス)

・用賀駅行き「馬事公苑交番」下車、目の前

※駐車場はございませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。



伝言板

●絵本の家ホームページ開設

(株)絵本の家は、絵本が大好きな皆様に、思わぬ発見をしたり、新たな感動に出会っていただきたくて、主にイギリス・アメリカからのロングセラーを中心に洋書絵本の輸入・卸に携わり、今年で16年目を迎えました。この度ホームページを開設いたしました。毎週交代で、3人の絵本のプロがおススメ絵本をご紹介しますコーナーもございます。ぜひご覧下さい。

主な取扱商品：ロングセラー絵本 受賞絵本(コルデコット賞など)カセットつき絵本 しかけ絵本絵本から飛び出した、元気なキャラクターたちのグッズ(キュリアス・ジョージ、メイシー、フェリックスほか)

【ホームページ <http://www.5a.biglobe.ne.jp/~ehonnoie/>】

〒171-0031 東京都豊島区目白1-7-14 目白久保ビル

Tel: 03-3985-3350 fax: 03-3985-4127

(大橋 由佳)

●平和と寛容の国際絵本展「ハロー・ディア・エネミー！」

ドイツのミュンヘン国際児童図書館の企画によるこの絵本展は、1999年5月より日本全国を巡回しています。総数100冊あまりー世界19カ国より41タイトルの本に各国語での翻訳本がそろえられている。日本原作3タイトル、邦訳は3分の1の本にある一の小規模な絵本展ですが、もともと質の高い絵本がそろえられているという絵本展そのものの力と、各地の開催者の熱意と努力で各々独自の企画がそこに加えられ、各地で大きな、そして心強い盛り上がりを見せてきています。お近くで開催されましたなら、是非ご覧下さい。いずれも絵本展の入場は無料ですが、1月の東京のこどもの城は入館料がかかります。なお、まだ会場等が未定の所などのお問い合わせは、下記のJBBY事務局までお願いします。

- ・2001.1.13～21 こどもの城(東京)
東京都渋谷区神宮前5-53-1 TEL 03-3797-5665
- ・2001.1.25～30 北海道上湧別図書館
北海道紋別郡上湧別街字中湧別 TEL 01586-2-2685
- ・2001.2.3～12 熊本市立図書館
日本ユニセフ協会
- ・2001.2.13～3.4 ラボ教育センター山口(予定)
日本ユニセフ協会
- ・2001.3.5～18 島根県立図書館
松江市内中原町5番地 TEL 0852-22-5725
- ・2001.3.20～4.7 天満屋(岡山)
日本ユニセフ協会
- ・2001.4.11～23 兵庫県龍野市立図書館
損龍公共図書館連絡協議会
- ・2001.4.29～5.6 東京都練馬区(会場未定)
- ・2001.5.7～20 同志社国際高校コミュニケーションセンター

主催 JBBY(日本国際児童図書館評議会) 日本ユニセフ協会

問い合わせ先 JBBY 日本国際児童図書館評議会「ハロー・ディア・エネミー！」実行委員会

〒162-0828 東京都新宿区袋町9番地出版クラブ会館内

Tel: 03-5228-0051 fax: 03-5228-0053

●軽井沢絵本の森美術館

《お話が紡ぐ絵本展》～昔話・伝説・神話への旅～

開催中～2001.1.14

絵本にはストーリーがあり、そのテキストの種類は多彩です。昔話、伝説、神話・・・と挙げていだけでも、実に様々なお話が絵本の題材となっていることに気づかされます。今展ではテキストを昔話、神話、伝説、詩、唄等に分類し、それぞれの特性を探りながら、一つの「物語」をストーリーと原画によって明らかにしていきます。

【開館】10:00～16:00(12月・1月)

【休館日】火曜日・1月1日 ※1月2日は開館

【入館料】大人700円・中高生500円・小学生400円

(エルツおもちゃ博物館との共通券もあり)

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

TEL: 0267-48-3340 FAX: 0267-48-2006

HomePage: <http://www.museen.org/ehon/>



「白いハト」ヘルガ・ゲーバート画©1985 Helga

●エルツおもちゃ博物館(軽井沢)

2000年秋冬展《サンタのプレゼント》

～おもちゃ工房から子どもたちへ～

開催中～2001.1.14

今展ではクリスマスの「プレゼント」をキーワードに、おもちゃとクリスマス文化をともに御紹介します。

御来館の方がエルツのおもちゃの温かさとお土産としてそれに込められた深い愛情を感じていただければ幸いです。

【開館】10:00～16:00(12月・1月)

【休館日】火曜日・1月1日 ※1月2日は開館

【入館料】大人400円・中高生300円・小学生200円

(軽井沢絵本の森美術館との共通券もあり)

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢193-3

TEL: 0267-48-3340 FAX: 0267-48-2006

HomePage: <http://www.museen.org/erz/>

●祈りの丘 絵本美術館

現代日本の絵本画家展 第5期

《田島征三展》

開催中～2001.1.14

「祈りの丘絵本美術館」のオープンは、1999年6月15日。オープニング企画は「現代日本の絵本画家展」です。今の子どもたちの暮らしに生きる、すぐれた絵本画家およそ50人の作品を、順次展覧しております。日本画の伝統をくむ水彩画や現代的なイラストレーションまで、多彩な画風を持つ絵本画家の作品をお楽しみ下さい。第1期を4ヶ月とし、およその世代ごとに、8期にわたって紹介します。

【開館】10:00～17:30(入館は17:00まで)

【休館日】月曜日(祝日の場合は翌日休館)

【入園料】一般・大学500円・小中高生300円(団体割引あり)

〒850-0931 長崎市南山手町2-10

TEL: 095-828-0716



「ちからたろう」(ホブラ社) / 1967

●いわむらかずお絵本の丘美術館

《いわむらかずお絵本づくり30年展》後期

2001.1.1～2.25

2000年、いわむらかずおは絵本作家活動30年をむかえました。本展では各年代ごとに絵本を紹介、その誕生にまつわるエピソードなどをエッセイと絵で語ります。また、絶版になり手に入らなくなった貴重な絵本も展示します。そして21世紀に向けて意欲的に創作に取り組んでいる、絵本の丘を題材にした新しい「14ひき」や『ゆうひの丘のなかまシリーズ』、エリック・カールとの合作絵本などのニュースもいち早く展示されます。

【開館】10:00～17:00(入館は閉館の30分前まで)

【休館日】月曜日(祝日開館、翌火曜日休館)

年末休館12/25～31 展示替えのための臨時休館あり

※元旦から開館

【入場料】大人900円

中高生700円

小学生500円

幼児300円

30名以上10%割引(要予約)

〒342-0611 栃木県那須郡馬頭町大字小砂 3097
TEL: 0287-92-5514 FAX: 0287-92-1818

●竹久夢二美術館

《文字の美展》

～絵と字の融合、書からレタリングまで～

2001.1.3～3.27

「文字は人なり」と言われますが、大正ロマンを代表する画家・竹久夢二がしたための文字も、その絵と同様、個性豊かで魅力に溢れています。流麗で繊細な筆跡でありながら、優れたデザイン感覚も備わった独特の表現様式は、夢二が書き表す文字の特徴といえるでしょう。本展では240点の作品と資料から、夢二の文字を様々な角度から考察、その造形や言葉の意に込められた、美と内面世界を探究していきたいと思います。

【開館】10:00～17:00(入館は16:30まで)

【休館日】月曜日(祝日開館、翌火曜日休館 ※1/8・2/12は開館、1/9・2/13は休館)

【入館料】一般800円・大高生700円・中小生400円
(弥生美術館共通)

※立原道造記念館との三館共通券(一般:1100円)有
〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-2
TEL: 03-5689-0462 FAX: 03-3812-0699

●弥生美術館

明治・大正挿絵界のライバル

《鱧崎英朋と鍋木清方展》～妖艶と清雅、美の競演～

2001.1.3～3.27



《松の内》 鱧崎英朋(右側)と鍋木清方(左側)との合作
【文芸倶楽部】大正5年1月号付録絵/個人蔵/協力・博文館新社

鱧崎英朋と鍋木清方は、明治末から大正初期にかけて、挿絵界における美人画の双璧といわれ、雑誌や新聞を舞台にめざましい活躍をみせました。しかし、2人が挿絵画家として一時期良ライバル的存在だったことは、今ではほとんど知られていません。

本展では、2人が特によく手がけた小説家、たとえば泉鏡花や柳川春葉、菊池幽芳らの作品の口絵や装幀、挿絵、関連資料などを中心

に、約250点を展示いたします。英朋の妖艶と清方の清雅、二人の美の競演をお楽しみ下さい。

【開館】10:00～17:00(入館は16:30まで)

【休館日】月曜日(祝日開館、翌火曜日休館 ※1/8・2/12は開館、1/9・2/13は休館)

【入館料】一般800円・大高生700円・中小生400円
(竹久夢二美術館共通)

※立原道造記念館との三館共通券(一般:1100円)有

〒113-0032 東京都文京区弥生 2-4-3

TEL: 03-3812-0012 FAX: 03-3812-0699

●斑尾高原絵本美術館

特別企画展《マックス・ベルジュイス絵本原画展》

開催中～2001.3.20

マックス・ベルジュイスは、ウサギのミッフィーで有名なディック・ブルーナや、しろくまのラルスが大冒険をするシリーズが人気のハンス・ド・ビアなどと並んで、オランダで人気の絵本作家。とぼけたカエルが主人公の代表作品より原画を約43点ほど展示いたします。日本国内でのまとまった作品展はこれが初めてとなります。是非ご覧下さい。

〈Miffy 45th ミッフィー誕生45周年記念 ワールドコレクション〉商品充実!

ミッフィー(うさこちゃん)がオランダの絵本作家ディック・ブルーナにより生み出されて、2000年は45周年にあたります。それを記念して「ワールドコレクション」と名付けられたグッズが作られています。どれも特別に販売される貴重な限定商品。来年のミッフィーのバースデー(6月21日)まで、45周年イベントが続行されることが決定しました。それを記念して、当館では記念グッズを追加納入し、残り少ないミッフィー記念グッズ(世界で限定400点のリトグラフをはじめ、ポスター・食器・ネクタイ・スカーフなど)を販売します。

【開館】9:30～18:00

【休館日】火曜日 ※1月2日・3月20日は開館

【入場料】700円(飲物付) ※幼児無料

〒389-2257 長野県飯山市斑尾高原八坊塚 11492-224
TEL & FAX: 0269-64-2807

事務局からのお知らせ

●第4回絵本学会大会(2001年度)開催のご案内

第4回絵本学会大会は、2001年5月4日(金)・5日(土)の2日間フェリス女学院大学(神奈川県横浜市)で開催されます。大会プログラムは、以下の通り予定しておりますが、内容の詳細および参加申し込み方法などは3月にご案内いたします。

全体テーマ:「絵本とおとな・絵本と子ども」

2001年5月4日(金) 大会1日目

13:00 1日目受付開始

13:30 開会式

14:00 基調講演 「絵本とおとな・絵本と子ども」

15:30 シンポジウム 「絵本のヤングアダルト現象」

17:30 総会受付

18:00 絵本学会総会

19:00 交流会

20:30 懇親会終了

2001年5月5日(土)

9:00 第2日目参加受付

9:30 研究発表開始

12:00 研究発表終了

昼食

13:00 ラウンドテーブル(分科会)開始

R1 絵本作家研究:赤羽末吉

R2 絵本表現研究:“もの”としての絵本

R3 絵本読者研究:絵本と赤ちゃん

13:00 ワークショップ開始

15:00 ラウンドテーブル(分科会)終了

15:00 ワークショップ終了

15:10 全体会(各ラウンドテーブル報告)、ディスカッション

16:30 全体会終了

16:35 閉会式

●第4回絵本学会大会研究発表者の募集

○研究発表募集要項

1. 発表者の資格 絵本学会の会員であること。
2. 発表テーマ 絵本および絵本に関連のある研究テーマで、未発表のものに限ります。
3. 発表時間 研究発表15分、質疑応答5分とします。(発表時間厳守)
4. 申込締切 2001年2月28日までに必着のこと。
5. 申込要領 ①発表テーマ②発表者の氏名③所属機関④発表要旨(800字程度)⑤発表の際使用する器材(スライド・プロジェクター、OHPなど)を、A4用紙にワープロで横書きし、絵本学会事務局あてに郵送してください。(FAXによる申込は受け付けません)
6. 発表者の決定 研究発表は、絵本および絵本に関連のある研究テーマであれば原則として無審査とし、順番などを3月中にお知らせいたします。

*受理した原稿は、返却しませんので必ずコピーをおとりください。

●第4回絵本学会大会作品発表者の募集

第3回大会から作品発表のための展示コーナーを設けました。これは絵本作家を目指す人たちのために発表の機会を設けるもので、以下の要領で募集します。

○作品発表募集要項

1. 発表者の資格 絵本学会の会員であること。
2. 発表作品 絵本で未発表のものに限ります。
3. 発表形態 原画または製本したもの(カラーコピーなどによる)。
4. 発表時間 大会第2日目の指定した時間内。
5. 申込締切 2001年2月28日までに絵本学会事務局に申し込んでください。
6. 申込要領 ①タイトル②発表者の氏名・年齢・住所・電話番号③所属機関④発表形態およびサイズ、枚数をA4用紙にワープロで横書きし、絵本学会事務局あてに郵送してください。(FAXによる申込は受け付けません)
7. 発表者の決定 作品発表は、原則として無審査とし搬入の方法などを4月中にお知らせいたします。

●理事会・運営委員会

9月30日 運営委員会 於:日本女子大学会議室
議題

- ・新体制での今後の活動について
- 「学会活動をどうとらえていくか」、「研究体制の強化、研究活動の活性化」、「研究紀要の充実」、「他団体との協調」、「セミナー、講演会の開催」などが検討された。
- ・次回絵本学会大会について
- ・新運営委員の追加推薦について
- 笹本純氏が新たに運営委員として推薦された。
- ・専門委員会について
- ・機関誌編集の進捗状況について
- ・日本アニメーション学会と漫画学会(現在設立準備中)との合同シンポジウムについて
- ・その他

9月30日 理事会 於:日本女子大学会議室
議題

- ・理事会の在り方と活動について
- ・理事会と運営委員会の役割
- ・運営委員の承認
- 運営委員として笹本純氏が承認された。
- ・今後の理事会日程
- ・その他

10月28日 運営委員会 於:日本女子大学会議室
議題

- ・「日本の絵本原画展イン・イングランド」に関連して
- ・第4回絵本学会大会について
- 大会のプログラムと内容が検討された。
- ・前回の理事会議事内容報告
- ・今後の活動について
- 前回到引き続き意見を交換
- ・研究紀要について
- ・絵本学会機関誌の刊行について

・日本アニメーション学会と漫画学会（現在設立準備中）との合同シンポジウムについて

・その他

12月9日 運営委員会 於：日本女子大学会議室

議題

・第4回大会のテーマ、プログラムの確認

大会のプログラムと内容、講演者、話題提供者の候補、タイムスケジュールなどが検討された。

・研究紀要の査読結果について

・機関誌編集の進捗状況について

澤田委員より編集内容、表紙案、判型、束見本と用紙が提示され、次回大会までに刊行したいとの報告がなされた。

・日本アニメーション学会と漫画学会（現在設立準備中）との合同シンポジウム報告

・事務局の運営について

・『絵本学会ニュース』について

機関誌の刊行にともない編集内容の再検討を行うことになった。

・理事会と運営委員会、運営委員会開催方法、スケジュールについて

・その他

●絵本学会事務局の電話番号、FAX番号が変わりました。

絵本学会事務局の電話番号、FAX番号が以下のように変わりました。

電話：042-342-6399 FAX：042-342-5191

電話は、個人研究室のため常時在室してはおりません。緊急な連絡以外は、

FAXまたはメール（ehongaku@musabi.ac.jp）をお願いいたします。

●絵本学会ホームページのURLが変わりました。

<http://apm.musabi.ac.jp/ehongaku/top.html>

ehongaku.musabi.ac.jp

●『絵本学会NEWS』の編集、制作を手伝ってくださる方を募集します

編集・制作に興味があり、必要に応じて武蔵野美術大学（小平市）まで来ていただける方を募集します。

主な業務は、原稿の整理、ワープロ入力、時に応じて取材などです。『絵本学会NEWS』は、年3回、4月、8月、12月に発行しますので、3月、7月、11月に集中した業務になります。作業は、パソコンによる自宅での作業が中心でボランティアです。